

英語エリア作り「校内留学」も

授業とは別に外国語で話すスペースを学内に設け、「校内留学」を売りにする大学もある。

武蔵大(東京都練馬区)は昨秋、学内に、英語をはじめ外国語が学べる「村」に見立てた

「MCV(Musashi Communication Village)」を設置した。「入村」に必要なパスポートを、在籍約4千人のうち希望者700人に発行。留学生も集う。村内では、会話は英語が原則で、雑誌やゲームもすべて英語だ。

平日午前9時から午後5時ごろまで、授業の合間と放課後に利用できる。英会話大手「GAB A」の講師による少人数レッスン、英語の料理教室などが無料で受けられる。パスポートには、学生が入村した日付や、学んだ内容を記録する。

運営には、約30人の学生スタッフ

が携わる。有給スタッフの社会学部2年、坂口博哉さん(19)はネイティブスピーカー(19)はネイティブスピーカー並みに英語を操り、慣れない学生と留学生の間を取り持つ。「米国ドラマが好きなので、連続ドラマを週一回一緒に見るプロジェクトを企画した。リピーターも出てきました」と手応えを話す。

村長を務める同大のジェイソン・ホロウェル准教授は「日本の学生は遊びの中で英語を練習する機会が少ないので、授業ではない環境を用意したかった。留学までではない、という学生に利用を広げたい」と話している。

大正大(東京都豊島区)は11年4月、留学生が先生役となる「ランゲージ・サポート・センター」を設置。英語、中国語、韓国語、ドイツ語に分かれ、日本人の学生と会話する時間を設けた。留学希望者を中心に、1日平均4〜5人が利用している

という。(小林恵士)



武蔵大の「MCV」共用スペース。英語で話す決まりだ＝東京都練馬区